

オンライン大学に入学した社会人の入学動機の分析

Analysis of Admission Motivation of Adults Who Apply for Admission
an Online University

田中 理恵子*
Rieko Tanaka*

向後千春**
Chiharu Kogo**

早稲田大学大学院人間科学研究科* 早稲田大学人間科学学術院**
Graduate School of Human Sciences, Waseda University*
Faculty of Human Sciences, Waseda University**

<あらまし> オンライン大学へ2013年に入学した社会人を対象として、入学動機を調査し、社会人が学び直そうとする背景として90人分のデータを分析した。因子分析の結果、3因子が抽出された。それぞれの因子に「可能性と挑戦」($\alpha=.77$)、「友人と人脈」($\alpha=.77$)、「仕事と専門」($\alpha=.79$)と命名した。また、入学動機として仕事や家庭などの直接的なライフイベントをあげている人は49%であり、その他を選択した人は33%であった。その他の自由記述では、病気などの出来事や、新しい可能性への挑戦などの理由が明らかになった。80%以上の社会人が、ライフイベントの変化をきっかけに、大学に入学しており、入学目的としては、女性は友人や人脈作りを目的に、男性は仕事に役立てたり、専門性を身につけたりすることを目的に入学していることが示唆された。

<キーワード> 生涯学習 成人教育 eラーニング 社会人学生 入学動機
オンライン大学

1. はじめに

1.1. 背景

近年、生涯学習社会の進展を背景として、学術研究の推進や高度な専門知識や能力を有する人材の育成が重要になっている。平成15年には、科学技術の進展や社会・経済のグローバル化に伴う社会的、国際的に活躍できる高度専門職業人養成を目的とした専門職大学院が創設された。その後、法科大学院・教職大学院などの専門職大学院が次々と開設され、社会で活躍している職業人に、様々な分野での更なる高度な専門性、最新の知識・技術を身につけさせるための学習の機会を提供している。

文部科学省では、社会に出てからも教育に回帰することが可能な制度的形態としてのリカレント教育や生涯学習社会の構築に向けて社会人の修学を容易にするための大学改革を推進してきた。平成19年には「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」により、日本国内の大学に対し、社会人受け入れを促進する施策を行っている。また、大学においては、社会人を対象とした特別選抜制度の導入、昼夜開講制の採用や夜間大学院の設

置、eラーニングを活用した教育プログラムの開発など、社会人が自己の生活に合わせて学びを継続できる環境が整備されてきている。このような従来型の大学における社会人への開放化により、大学や大学院に社会人学生が増加しており、平成24年度学校基本調査によると、平成19年から5年間で、全国の大学生及び大学院生のうち、社会人が占める割合は20%となっている。

1.2. 社会人教育に関する研究

社会人の教育に関する研究としては、日本労働研究機構が1995-1996年に実施した「大学院修士課程における社会人のリフレッシュ教育に関する調査」(本田1999)が挙げられる。これによると、大学院に通学している社会人学生はフルタイムで働いている「フルタイム就労」が最も多く、次いで、勤務先から労働をすべて免除されて大学院に派遣されている「労働全免除派遣」および、大学院に入学するために会社を退職した「入学目的退職」の者であった。本田は、入学目的退職は女性の比率が多いことが特徴的であると述べている。そして、入学目的としては、「幅広い視野や知識・教養を得る」、「学位や資

格を取る」, 「職務に必要な知識・能力を得る」, 「人間関係やネットワークを形成することであり, 昇進, 昇給などの職場の内部労働における効果を目的として再入学した者は非常に少なかったことが示唆された。

夜間大学の大学院に入学した社会人を対象にした調査した早野・青島・筑後(1998)の研究によると, 夜間大学院に通学している社会人学生は40代の割合が多く, 入学者の過半数を女性が占めていると述べている。入学目的としては, 「職業に役立てるため」, 「学習することそのものを目的」, 「社会の変化に対応できる能力を養うため」, 「自分の可能性に挑戦するため」, 「人生の転機・状況からの脱皮」, 「資格取得」といった理由が挙げられた。

また, 社会人教育のひとつとして2003年に制度化された新しいタイプの大学院として, 専門職大学院がある。高度専門職業人を養成することを目的とした実践的な教育を行うことが特色である。特に経営系の専門職大学院はアメリカのビジネススクールをモデルにしており, 学位であるMBA保持者は企業の評価も高いことで知られている。

このような経営系専門職大学院における社会人再教育の調査(吉田2012)によると, 専門職大学院に入学する社会人は, 企業からの派遣としてくる場合もあるが, 自らの意思で入学してくる場合がほとんどである。入学目的としては, 「専門的な知識を得るため」, 「幅広い知識や教養を得るため」という内的誘因がほとんどであり, 「より高い給料や役職に結びつけるため」, 「起業のため」といった昇進, 昇給, 転職に結びつく外的誘因は大きな魅力になっていないことが明らかになった。吉田は, ほとんどの学生は, 職業上のキャリアアップのために大学院の成果を結び付けようとする意識があるわけではなく, また職場で自己アピールをする姿勢は見られないと指摘している。

これらの先行研究から, 現在の日本企業が, 学歴の再取得や大学院の評価をする仕組みを持たないということが示された。また, 社会人自身も, そのことを織り込み済みで進学しながら, 自己欲求を満足させるために学習し

ていることが示された。

1.3. 成人発達と生涯学習に関する研究

成人期の発達心理学に関する先行研究としては, レビンソン(1992)が, 中年男性の個人史を分析し成人期の発達段階説を提唱した。中年期には様々なライフイベントと関連する問題に直面することが多いため, 人生半ばの過渡期に心理的な危機が訪れると主張したものである。レビンソンは, 成人期前期までに社会に適応しようと自分自身を抑圧してきた人々が, 中年期において社会環境の要因によって人生に著しい影響を与える危機を経験し, 自らのライフステージの変化を受け止めなければならぬ戸惑いや自信喪失などを感じ, 自分の内面を見直すことで新しい人生を再構築していこうと試みる時期であると言っている。

また, 生涯学習に関する先行研究として, 堀・三輪(2006)は, メジローの理論(2012)を以下のようにまとめている。(1)おとなの学習には, 確立された価値体系や経験などがある。(2)これらの価値観が学習者の環境と一致する場合は, 学習をやり易くしている。(3)人生上の危機となるようなライフイベントによって, これまでの価値観の修正が迫られると, 従来の価値観が動揺し, それらを再検討する必要が生まれる。(4)別の価値観を選択することによって新しい事態に対応していこうとする。(5)意識変容の学習を成人学習に位置づける理由として, 子どもの学習は形を作ることを重視するのに対し, 成人の学習は今まで身につけてきたものの形を変えることに重点をおいている。

1.4. 問題提起

日本における生涯学習社会としての社会的な動きや, 社会人学生の動向, 成人発達と生涯学習に関する先行研究をみてきた。しかし, 成人教育に関しての研究はまだ歴史的に浅く, 社会人が学び直すための入学動機やその背景についての研究はまだ少ない。

社会人は, どのようなきっかけで, 学び直そうとするのであろうか。社会人が学び直そうとする背景には, 社会人自身のライフイベントとの関わりが, 学ぶためのニーズ以外に影響していることが考えられる。そこで, 本

研究では、eラーニングを活用したオンライン大学に入学した社会人を対象に、入学動機やその背景を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査対象者

都市部近郊にあるX大学Y学部のeラーニングシステムを活用した通信教育課程に2013年度に入学した1年次の社会人学生を対象として調査を行なった。いずれも導入科目「スタディスキル」の受講生であり、回答期間は2013年6月2日～6月16日（15日間）であった。回答はいずれも無記名で行い、大学の学習管理システムのアンケート機能を用い、91名の回答を得た。欠損値のあった1名を除外し、有効回答数は90名（平均43.88歳、 $SD=8.88$ ）であった。

2.2. 尺度の作成

社会人が従来の大学に入学する動機についての質問項目を作成するため、関・向後（2011）調査においてM-GTA分析により抽出された入学動機および入学までの心理プロセスに関する結果を参考に質問項目を作成した。

入学動機30項目、ライフイベント項目2項目（自由選択）、フェイス項目からなる質問紙を作成した。本質問紙調査の質問項目のうち、入学動機30項目について「1. まったくあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. ややあてはまる」、「4. よくあてはまる」、「5. 非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の順に1点から5点の得点を配した。

また、ライフイベント項目16項目の選択肢うち、入学動機となった回答を1つだけ選択してもらい、16項目以外の回答であれば、自由記述とした。さらに、フェイス項目では、所属学科、性別、年齢、勤務形態、結婚の有無、子どもの有無をたずねた。

3. 結果

3.1. 項目分析

入学動機の尺度30項目の平均値、標準偏差を算出し、得点分布を確認した。いくつかの項目で得点の偏りが見られたが、いずれの項目も入学動機を把握する上で必要な内容が含まれていると判断し、すべての項目を以後の分析とした。

3.2. 探索的因子分析

次に、入学動機尺度の30項目に対して、最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の変化（5.80, 2.90, 2.30, 1.02, 1.81, …）と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子が妥当であると考えられた。そこで、再度3因子を仮定して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、.35以上の負荷量を示さなかった14項目を分析から除外し、残りの16項目に対して、再度、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の因子パターンと因子間相関を表1に示した。なお、回転前の3因子で16項目の全分散の説明率は44.66%であった。

第1因子は8項目で構成されており、「自分の可能性を試してみたいので」、「自分の時間を有効に使いたいの」、「自分が本当にしたいことを探したいので」、「幅広い教養を身につけたいので」、「過去に勉強したかったことに挑戦したいので」などを表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「可能性と挑戦」と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「一生つきあえる友達ができそうなので」、「いろいろな人と知り合いになれるので」、「楽しい大学生活を経験できそうなので」などを表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「友人と人脈」と命名した。

第3因子は3項目で構成されており、「自分の仕事を学問的に見直したいので」、「自分の仕事に役立ちそうなので」などを表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「仕事と専門」と命名した。

表 1 入学動機尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転， $N=90$ ）

| 項目 | I | II | III |
|--|------|------|------|
| 第 1 因子：可能性と挑戦 ($\alpha=.77$) | | | |
| 11 自分の可能性を試してみたいので | .79 | .04 | .03 |
| 14 自分の時間を有効に使いたいので | .73 | .06 | -.06 |
| 12 自分が本当にしたいことを探したいので | .70 | .06 | -.20 |
| 08 幅広い教養を身につけたいので | .49 | .12 | .16 |
| 15 過去に勉強しなかったことに挑戦したいので | .49 | -.10 | .08 |
| 21 家族の協力が得られたので | .43 | -.14 | -.06 |
| 13 自分の夢を実現したいので | .38 | .02 | .17 |
| 20 学費の用意ができたので | .38 | -.15 | .01 |
| 第 2 因子：友人と人脈 ($\alpha=.77$) | | | |
| 18 一生つきあえる友達ができそうなので | -.19 | 1.02 | .01 |
| 17 いろいろな人と知り合いになれそうなので | .09 | .73 | .12 |
| 19 楽しい大学生活を経験できそうなので | .06 | .66 | -.07 |
| 25 スクーリングの機会があるので | -.07 | .48 | .06 |
| 02 この学部で取れる資格を取得したいので | -.05 | .37 | -.22 |
| 第 3 因子：仕事と専門 ($\alpha=.79$) | | | |
| 07 自分の仕事を学問的に見直したいので | .07 | -.13 | .99 |
| 06 自分の仕事に役立ちそうなので | -.16 | .04 | .80 |
| 09 最新の専門知識を身につけたいので | .16 | .12 | .49 |

| | I | II | III |
|-------|-----|-----|-----|
| 因子間相関 | I | — | .44 |
| | II | .44 | — |
| | III | .28 | .12 |
| | | | — |

内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ「可能性と挑戦」で $\alpha=.77$ ，「友人と人脈」で $\alpha=.77$ ，「仕事と専門」で $\alpha=.79$ と十分な値が得られた。

3.3. 入学動機尺度値の属性による分析

3.3.1. 年齢による影響

年齢によって入学動機の 3 因子に影響があるのかを検討するために，年齢（30 代以下・40 代・50 代以上）による一要因分散分析を行った（図 1）。その結果，「仕事と専門」においては，主効果に有意傾向が認められた（ $F(2,87)=2.85$ ， $p<.10$ ）。しかし，多重比較を行ったところ，有意差はみられなかった。

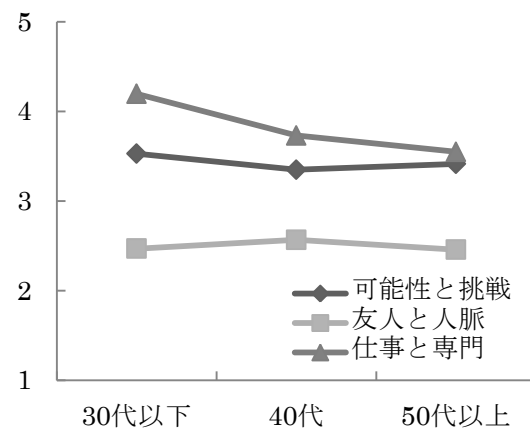


図 1 入学動機尺度値の年齢による尺度得点

3.3.2. 性別による影響

性別によって入学動機の3因子に影響があるのかを検討するために、性別（男性・女性）による t 検定を行った（図2）。その結果、「友人と人脈」においては、5%水準で有意に男性が高かった（ $t(88)=2.09, p<.05$ ）。また、「仕事と専門」においては、1%水準で有意に女性が高かった（ $t(88)=3.04, p<.01$ ）（表2）。このほか、結婚の有無や子どもの有無、勤務形態の有無については、有意差はみられなかった。

3.4. ライフイベントの分析

3.4.1. ライフイベントの内容

社会人が学び直す動機として、ライフイベントの影響があるのかを検討するために、入

学動機となったライフイベント項目および自由記述を検討した。その結果、60人（46%）から、ライフイベントが入学動機のきっかけになっているという回答を得た（図3）。

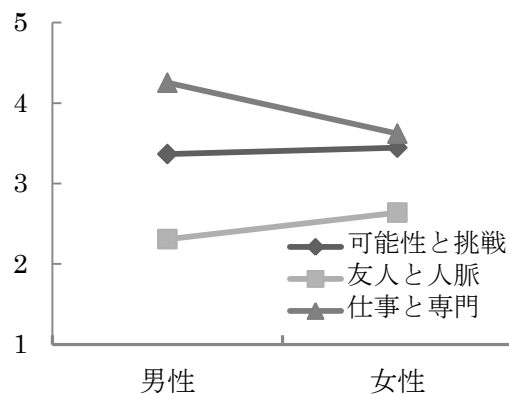


図2 入学動機尺度値の性別による尺度得点

表2 入学動機尺度値の年齢および性別による尺度得点

| | n | 可能性と挑戦 | | 友人と人脈 | | 仕事と専門 | |
|-------|----|--------|-----|-------|-----|-------|------|
| | | M | SD | M | SD | M | SD |
| 30代以下 | 29 | 3.53 | .77 | 2.47 | .71 | 4.20 | .86 |
| 40代 | 47 | 3.35 | .58 | 2.57 | .73 | 3.73 | .99 |
| 50代以上 | 14 | 3.41 | .75 | 2.46 | .77 | 3.55 | 1.03 |
| 男性 | 33 | 3.37 | .77 | 2.31 | .78 | 4.25 | .71 |
| 女性 | 57 | 3.45 | .62 | 2.64 | .69 | 3.62 | 1.07 |

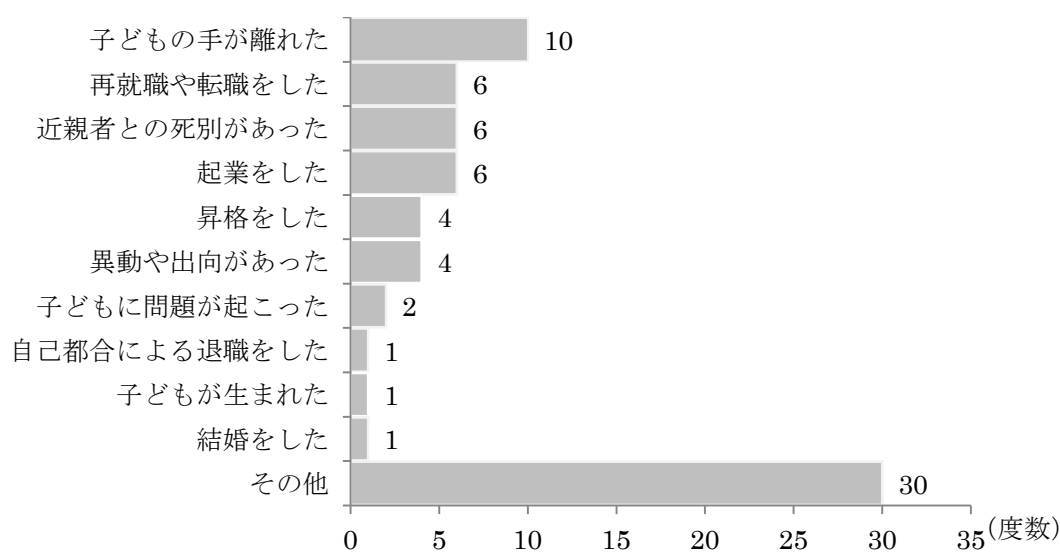


図3 入学動機に影響したライフイベントの度数

その内容としては、度数の多い順から、「子どもの手が離れた(10)」、「再就職や転職をした(6)」、「近親者との死別があった(6)」、「起業をした(6)」、「昇格をした(4)」、「移動や出向があった(4)」などの項目が入学動機となっていることが明らかになった。

その他を選択した人は30人(33%)であった。その自由記述は、「東日本大震災で被災した」、「癌になった」、「障害者になった」などの出来事がきっかけとなったり、「40歳過ぎて何かの勉強に取り組みたい」、「自分が諦めてきたことへのチャンス」など新しい可能性への挑戦、そして「転職をするための学位取得」、「仕事での成果」といった仕事に関連する理由が挙げられた。また、ライフイベントが直接のきっかけとなっていないという回答は19人(21%)であった。

3.4.2. ライフイベントによる影響

ライフイベントの選択回答のうち、「1. 特になかった」を除いた項目を仕事関連と家庭関連に分類した。「2. 異動や出向があった」、「4. 自己都合による退職をした」、「6. 昇格をした」、「7. 再就職や転職をした」、「8. 起業をした」などの項目を「仕事関連」とした。

「9. 結婚をした」、「11. 子どもが生まれた」、「12. 子どもの手が離れた」、「13. 子どもに問題が起こった」、「14. 近親者との死別があった」などの項目を「家庭関連」に分類した。

ライフイベントによって、入学動機の3因子に影響があるのかを検討するために、ライフイベント別(仕事関連・家庭関連)によるt検定を行った(図4)。その結果、「友人と人脈」において、5%水準で有意に仕事関連が高かった($t(39)=6.15, p<.05$) (表3)。「可能性と挑戦」、「仕事と専門」においては、有意差はみられなかった。

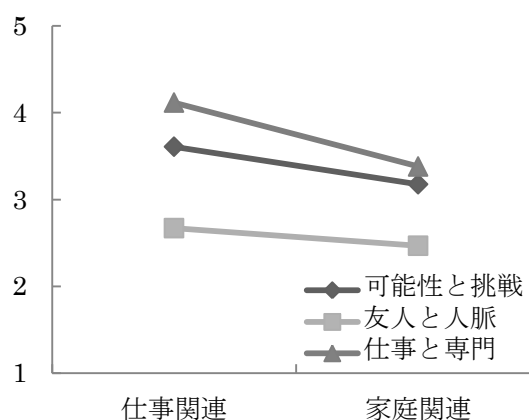


図4 入学動機に影響したライフイベントによる尺度得点

表3 入学動機に影響したライフイベントによる尺度得点

| | n | 可能性と挑戦 | | 友人と人脈 | | 仕事と専門 | |
|------|----|--------|-----|-------|-----|-------|------|
| | | M | SD | M | SD | M | SD |
| 仕事関連 | 20 | 3.61 | .73 | 2.67 | .83 | 4.12 | .96 |
| 家庭関連 | 21 | 3.18 | .64 | 2.47 | .49 | 3.38 | 1.00 |

4. 考察

4.1. 年齢による影響

年齢によって入学動機の3因子に影響があるのかを検討したところ、「仕事と専門」においては、主効果に有意傾向がみられたことから、年代が若いほど、仕事に役立てたり、専門性を身につけたりするために入学している傾向があることが示唆される。

リクルートワークス研究所(2002)が行った調査では、雇用不安を感じている男性は57%、女性は51%であった。雇用不安を持つ

ている人たち、特に中年期の人たちが、自分が職を失った時、再就職しやすいかどうかの雇用不安を感じていた。これには、日本の経済状態の悪化により、終身雇用等の日本型雇用システムが維持出来なくなっている現状から、転職を見据えた人や、さらに現在雇用されている職場で仕事を続けていくために専門性を身につけようとする人が多いからと考えられる。

さらに、日本の転職市場での学歴が影響していることも推察される。学歴に関して、2009年版中小企業白書(2009)によると、

大企業へ転職するための採用条件として大学卒業以上の学歴が必要とされる現状がある。本調査のオンライン大学の学生は、学部へ入学した社会人学生であるため、ライフイベントの入学動機の詳細記述においても、「転職を考えた際、応募したい仕事の必須事項に大学卒とあることが多い」、「転職を決意したため」という記述から、学士の学位を取得することや、専門性を身につけて転職を目指したいという動機がみてとれる。

4.2. 性別による影響

性別によって入学動機の3因子に影響があるのかを検討したところ、「友人と人脈」において有意差がみられ、男女の平均値をみると男性よりも女性の方が高かった。このことから、女性は、男性よりも友人を作ったり、人脈を築いたりすることを目的として入学していることが示唆された。

一方、放送大学学生と公民館学習者の比較を調査した浅野（2002）によると、公民館の女性学生よりも放送大学の女性学生の方が、交友志向が有意に低い結果を示していた。これについて、放送大学の場合は通信教育課程であるため学生同士の交流が少ないが、公民館の学習者は定期的に集まって学習するので友人同士の交流機会が多いことが影響されていると考察している。

しかし、調査対象のオンライン大学もeラーニングを活用した授業内容であり、実際に大学に通学することは少ないはずであるにもかかわらず、「友人と人脈」に有意差が出ているのが特徴的である。これは、オンライン大学が、入学式への参列、学期末ごとに学内で指導教員と学生との懇親を深めるイベントの企画以外にも、オンライン大学学生のサークル活動によって学生同士が交流するための各種イベント等が開催されていることが大きく影響していると考えられる。また、本研究の調査期間が6月という時期であったため、入学式後の各種イベントに参加した学生が、学生同士での交流の機会を体験していることも影響しているかもしれない。

中村（2003）は、女性は男性に比べ出会いの初期の段階ではみずからの成果の大きさと選択比較水準の高さによって関係関与性を決

める傾向がある。女性は2者関係からもたらされる報酬の大きさを当初から考慮に入れながら交際を進展させていくことが強いが、男性は、友人関係の構築時期は広範囲にわたる仲間集団の形成に関心があり、その集団の中で相対的に報酬制の高い関係を見極めようとする傾向をもっている」と述べている。このことから、男性よりも女性の方が、対人的志向性が高いために「友人と人脈」を目的として入学していることが考えられる。

つぎに、「仕事と専門」においては、男性は、女性よりも仕事に役立てたり、専門性を身につけたりすることを目的として入学していることが示唆された。

その理由として、性別役割が根強く残る日本では、家庭役割の責任は女性の側に求められることが多い。その結果、女性が個人としての自分に十分な資源を配分できない状況を伴うため、男性よりも女性は、キャリア志向を望まない傾向がある。しかし、男性は一旦職に就き、結婚し、家計を担い始めて後、自己の状況を大幅に変えることは難しい。まして、日本経済の停滞や社会構造の変化から、転職や異動だけでなくリストラなどの大きな変化を余儀なくされる可能性が大きい。よって、その不安な将来を見据えて、仕事の専門性を高めていくことを目的として入学していることが影響していると考えられる。

4.3. ライフイベントによる影響

社会人が学び直すきっかけとして、60人（46%）から、ライフイベントが入学動機の原因になっているという回答を得た。人生の中で体験するライフイベントには、予測可能な危機と、予測不能な危機に分類される。予測される危機としては、入学、卒業、就職、結婚、定年退職などのライフイベントであるが、予測不能な危機としては、怪我や病気、親の介護、職場での配置転換、リストラによる失業、身近な人の死などといったライフイベントがある。予期せぬ出来事によって、人々は驚き、悲しんだり、苦しんだりすることも予想され、ライフイベントが心身に与える影響は大きい。しかし、人生上の危機となるようなライフイベントによって、人はこれまでの価値観を再検討し、別の価値観を選択する

方法の一つとして、学び直す気持ちが生まれることが考えられる。その一方で、ライフイベントが入学動機の直接のきっかけになっていないといった回答もあった。関・向後(2011)は、社会人の入学動機を、顕在的要因だけでなく、個々の社会人が大学に至った過去の生い立ち、挫折体験、他者の影響などが入学動機の潜在的遠因となっていることを示している。このように、自分では意識していない潜在的遠因から入学してきていることも考えられる。

ライフイベントを仕事と家庭に分類して検討したところ、「友人と人脈」において、家庭関連よりも仕事関連の方が高かった。このことから、仕事に関連したライフイベントが入学動機となった社会人は、友人や人脈に関心を持っていることが明らかになった。オンライン大学は、自宅において一人で学ぶ環境である。しかし、潜在的意識としては、大学で友人を作ったり、人脈を広げていきたいと思って入学していることも考えられる。

5. 結論

オンライン大学へ2013年に入学した社会人を対象として、入学動機を調査し、社会人が学び直そうとする背景として90人分のデータを分析した。因子分析の結果、3因子が抽出された。それぞれの因子に「可能性と挑戦」($\alpha=.77$)、「友人と人脈」($\alpha=.77$)、「仕事と専門」($\alpha=.79$)と命名した。また、入学動機として仕事や家庭などの直接的なライフイベントをあげている人は49%であり、その他を選択した人は33%であった。その他の自由記述では、病気などの出来事や、新しい可能性への挑戦などの理由が明らかになった。80%以上の社会人が、ライフイベントの変化をきっかけに、大学に入学しており、入学目的としては、女性は友人や人脈作りを目的に、男性は仕事に役立てたり、専門性を身につけたりすることを目的に入学していることが示唆された。

参考文献

浅野志津子(2002) 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程. 教育心理学研

究, 50(2): 141-151

中小企業庁(2009) 2009年版中小企業白書, 第1節雇用動向と中小企業で働く人材の現状. <http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/h21/h21/html/k3110000.html> (参照日 2013.09.08)

レビンソン, D.J(著), 南博(訳)(1992) ライフサイクルの心理学. 講談社, 東京 (Daniel J. Levinson 1978 *The Seasons of a Man's Life*, NewYork: Ballantine Books.)

早野喜久江, 青島和子, 筑後幸恵(1998) 社会人学習者にとっての夜間大学院の意味. 高等教育と生涯学習. 東洋館出版社, 東京

堀薫夫, 三輪健二(2006) 新訂生涯学習と自己実現. 日本放送出版協会, 東京

本田由紀(1999) 大学院修士課程における社会人教育の実態. 日本労働研究機構研究紀要, (18): 1-14

メジロー, J(著) 金澤睦・三輪健二(訳)(2012) おとなの学びと変容—変容的学習とは何か. 鳳書房, 東京(Jack Mezirow 1991, *Transformative Dimensions of Adult Learning*, Jossey-BASS.)

文部科学省(2007) 平成19年社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/shakaijin.htm(参照日 2013.08.31)

文部科学省(2012) 平成24年度学校基本調査. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2012/08/27/1324976_3_1.pdf (参照日 2013.08.31)

中村雅彦(2003) 対人魅力の形成. ふくろう出版, 東京

リクルートワークス研究所(2002) 雇用不安と転職の実態. <http://www.works-i.com/> (参照日 2013.09.08)

関和子, 向後千春(2011) eラーニング主体の大学に入学する社会人の潜在的動機に関する分析. 日本教育工学会研究報告集, JSET12-3, pp. 107-114

吉田文(2012) 社会人の再教育と経営系専門職大学院. 日本生涯教育学会, (33): 3-21